

ルーマニア語の疑問文

倍賞 和子

Kazuko Baisho

1. はじめに

統一テーマについて話し合う場合、なるべく多くのロマンス語と比較することが有意義だと思うので、ルーマニア語の疑問文についての概略を、筆者の見解に従って纏めて紹介するものである。

ルーマニア語を学習していて、教科書や文法書に疑問文についての記述がないことに気がつく。つまり、疑問文についての形態、統語的記述がないのである。外国人にルーマニア語を教える教師も、疑問文はどのようにして作るか、平叙文とどのように違うかなど教えることもなく、イントネーションの違いは恰も全ての言語に共通の現象で、疑問の気持ちがあれば自然に上昇イントネーションで話すものであるかのように、普通疑問文に於いては語末で上昇させ、学習者も当然のようにそれを受け入れているというわけである。ルーマニアで出版された文法書や教科書の中で、筆者が眼にしたほぼ唯一の疑問文のイントネーションについての記述が、*Limba română manual pentru studenții străini*(Editura Didactică și Pedagogică, București 1982)の中にある。それは、疑問文についてではなく、イントネーションについて述べられた部分にある。そこでは、平板調、上昇調、下降調の例が挙げられ、単語群ごとの高さが分かるように三段階に行を変え、下線を施すことによりイントネーションを表わすよう示されている。

ルーマニア語のイントネーションについての図

a) Dumneavoastră sunteți din România. 「あなたはルーマニア出身です。」

b) Dumneavoastră sunteți din România? 「あなたはルーマニア出身ですか。」

c) Cine sunteți dumneavoastră? 「あなたはどなたですか。」

c') Ce este aici? 「ここに何がありますか。」

c) Unde
 este
Facultatea de Matematică? 「数学部はどこにありますか。」

これは、ルーマニア語のイントネーションの説明のために例を挙げたのであって、それ以外にも疑問文についての説明した項目はどこにも見当たらない。学習者である外国人に対し誠に不親切である。たぶんルーマニア語の疑問文は説明するまでもないほど簡単であるからであろう。この簡単で「当たり前」のことを、敢て、以下に記述することにする。

2. 普通（全体）疑問文

ルーマニア語の普通疑問文は、基本的に、イントネーションによって表わされる。その際アクセントも重要である。平叙文を上昇調イントネーションで発音すると疑問文となる。その他、語順等、文の構成は平叙文と全く同じ場合が多い。また、書く場合は文末に「？」をつければよい、ということになる。

ところで、イントネーションの例の図 b) で、din România が一番高い部分に置かれている。つまり最も高く発音するようにというわけだが、この中の全ての音節を他より高く発音するといささか滑稽に聞こえる。英語の上昇調においても同様だが、当該語句中のアクセントのある音節から高く発音するのが自然である。România においては nia の -ni- の部分を最も高く発音すればよい。

普通疑問文（疑問詞のない疑問文）のその他の例

d). Îl așteptați aici? 「ここで彼を待っているのですか。」

d'). Îl așteptați aici. 「ここで彼を待っているのですね。」

e). A cumpărat cartea aceasta la București? 「彼はこの本をブカレストで買ったのですか。」

e'). A cumpărat cartea aceasta la București. [彼はこの本をブカレストで買いました。]

b) のイントネーション図の例に倣えば、la București 全体が高い位置に置かれるので、全体が高く発音されるように見えるが、実際は -ești の中の -e にアクセントがあるので、そこが最も高く発音される。

3. 疑問詞（部分）疑問文

疑問詞のある疑問文では、疑問詞は文頭に置かれ、アクセントをつけて発音し、文のイントネーションは下降調となる。疑問詞が文頭に置かれる関係上、語順も平叙文と異なる場合が多いので、イントネーションの重要性は普通の疑問文より小さいと言える。幾つかの例と、その答えを下に示す。

f) Cine sunteți dumneavoastră? 「あなたは誰ですか。」

f')(Eu) sunt Maria Savescu. 「私はマリア サベスクです。」

g) Ce puteți să vedeți de aici? 「ここから何が見えますか。」

g')Pot să văd o clădire foarte înaltă. 「とても高い建物が見えます。」

h) Al cui copil este Ion? 「イオンは誰の子供ですか。」

h')(Ion) este copilul lui Dumitrescu. 「(イオン) はドゥミトレスクの子供です。」

i) Când au sosit studenții japonezi la București? 「日本人学生達はいつブカレストに着いたのですか。」

i')(Ei) au sosit ieri. 「(彼らは) 昨日着きました。」

j) Unde este Magazinul Universal? 「百貨店はどこにありますか。」

j')(Magazinul Universal) este în centrul orașului. 「(百貨店は) 町の中心にあります。」

k) Câte mere ați cumpărat? 「あなたは幾つのリンゴを買いましたか。」

k')Am cumpărat cinci mere. 「(私は) 5 個のりんごを買いました。」

ここで、ルーマニア語の疑問詞について短い解説をしたい。ルーマニア語の疑問詞には次のようなものがある。これらが、単独、または他の語とともに文頭に置かれて疑問文を作るのである。

疑問代名詞 : cine 「誰、誰に」、ce 「何」、care 「どれ」、cât 「幾つの、どれだけの」

疑問形容詞 : 疑問代名詞の内、cine 以外は形容詞の働きもする。

ce scop 「何の目的」、care fată 「どの少女」、câți oameni 「何人の人」

疑問副詞 : unde 「どこで、どこに」、când 「いつ」、cum 「どのように」、

前置詞を付けて、de unde 「どこから」、până când 「いつまで」

de ce 「なぜ」は、de+疑問代名詞 だが、副詞と同じ働きをする。

下線を付した疑問詞は、性、数、格による屈折形がある。例 h) al cui copil に於いて、厳密には cui が疑問詞 cine 「誰(が)」の属格であり、al は所有冠詞で、所有されるものの性、数に応じて形を変える。属格としては所有されるものと一緒に使われることが普

通である上、与格も *cui* 「誰に」と同じ形であることから、*al cui*、*a cui* のように所有冠詞を伴った形を属格形ということが多い。

4. 疑問詞の他に、語彙的にみて、疑問文だと想定できる文

普通疑問文が語末のイントネーションではっきりするのは上に述べた通りであるが、語末まで行く前に、或いは、イントネーションがはっきりしなくても、疑問文だと想定させることができる単語がある。*cumva* 「ひょっとして」、*oare* 「いったい」などである。

l) *Nu cumva știți unde a plecat fiul Anei?* 「ひょっとして、アナの息子がどこへ行ったかご存知ではありませんか。」

m) *Nu v-a deranjat cumva copilul meu?* 「ひょっとして子供がご迷惑をおかけしましたか。」

n) *Oare pe unde se pot găsi așa pietre?* 「いったいどこにこんな石があるだろうか。」

5. 語順の問題

ルーマニア語では普通疑問文と平叙文の間に語順の違いがないことは上で述べた通りである。しかし、疑問詞疑問文では疑問詞を文頭に置くので、平叙文では動詞の後に置かれるべき目的語や副詞が疑問詞として文頭に立つことになり、疑問文と平叙文では語順が異なる場合が生じることになる。上記 3. の疑問詞疑問文の例において、問いの答えの中で、それぞれの疑問詞と同じ文法的働きをしているものの位置が、多くの場合文頭でないことがわかる。

これとは別に、ルーマニア語でも、古語や方言では疑問文で助動詞と動詞（不定詞や過分詞等）の倒置が見られる。しかし、これは現代の文章語には見られない。

o) *Spus-a oare cineva(oare cineva a spus) ce putea să facă guvernul român?*

「誰かがルーマニア政府に何が出来るんだ、と言ったのだろうか。」

p) *Gătitu-le-ați? (le-ați gătit)* 「あんたらがそれを料理したのかい。」

6. 現代ルーマニア語の疑問文に倒置の傾向（?）

q) *Ziarele anunță încetarea războiului din X.* 「新聞は X の戦争の停止を報じている。」

r) *Ce anunță ziarele?* 「新聞は何と言っているのか。」

自然なルーマニア語では上の二つの文のように、q) では主語、動詞の順、r) では動詞、主語の順で表現する。だから、疑問文では動詞が前に来ることが多いと言われることもあ

る。また、動詞で始まる疑問文が多い、ということをも主張するために次の例を挙げているのを目にしたこともある。

- s) *Vine cineva?* 「誰か来るのか」。
- t) *Ai cumpărat ceva?* 「君は何か買ったのか」。
- u) *Pleci undeva?* 「君はどこかへ行くのか」。

しかし、ルーマニア語では、動詞が活用するので、分かりきった主語は表現しないのが普通であり、会話の中や、前に述べたことを表す場合も、強調する場合を除き、代名詞を主語として表現しない。上の t), u) を平叙文にした場合、

- t) *Ai cumpărat ceva.* 「君は何か買った。」
- u) *Pleci undeva.* 「君はどこかへ出かけるんだね。」

以外に言いようがないし、s) の平叙文として、「誰か来る。」という場合、s) *Cineva vine.* は不自然で、s) *Vine cineva.* の方が自然である。目的語として代名詞を使う場合は厳密な法則のあるルーマニア語だが、主語の位置については非常に自由なので、疑問文だから動詞が前に出ているのか、ルーマニア語の特徴としてそうなのかは **native speaker** が自然に話している例を沢山集めて、綿密な分析を行わなければ結論を出すことはできない。

7. おわりに

「行く。」 「うん、行く。」 というように、疑問文であることを専らイントネーションで表わすことが、日本語の日常会話でも珍しくない。ルーマニア語では改まった場でもイントネーションにより普通疑問文であることが伝わるのである。疑問詞を用いた疑問文で疑問詞を文頭に置くというのが疑問文を作る上での唯一の法則といえる。その際、平叙文と語順が変わることがあるが、結果的に変わるのであって、語順を変えることが疑問文を作る上での必要条件ではない。敢て触れるほどのことがないから、疑問文についての記述が殆どないのであろう。